

## アイニーに帰せられた4年代記の成立年代と執筆意図

中 町 信 孝

はじめに<sup>1)</sup>

マムルーク朝後期の歴史家バドルッディーン・アル＝アイニー Badr al-Dīn Maḥmūd al-‘Aynī (1360–1451) は、大年代記『世の人々の歴史における真珠の首飾り *‘Iqd al-Jumān fī Ta’rikh Ahl al-Zamān*』(以下『真珠』と略)の著者として知られている。彼はまた、アシュラフ・バルスバーイ al-Ashraf Barsbāy をはじめとする歴代スルターンとの親交の深さでも知られており、特に歴史講話や伝記執筆といった歴史叙述行為が彼の社会的・政治的活動と密接に関わっていたことは、しばしば指摘される [*‘Iḷān*: 43–44; *Nujūm*: 15/111; Schimmel 1965: 356–357; Rosenthal 1968: 104–105; Flemming 1977: 252; Petry 1981: 69–70; Berkey 1992: 100, 153; Broadbridge 1999: 94–97]。

筆者はこれまでにアイニーの著作を対象とした文献学的考察を行い、彼の年代記におけるマムルーク朝前期に該当する箇所を分析し、現在『真珠』として知られている写本の中には、4種類の異なるテキストが混在していることを明らかにした。その4種類とは、1つは『真珠』の正本であるものの、残る3つはアイニーの他の年代記『時代の人々の描写における満月の歴史 *Ta’rikh al-Badr fī Awṣāf Ahl al-‘Aṣr*』(以下『満月』と略)、および、『真珠』『満月』それぞれの要約である [中町 2004: 146–151]。

同時代のアラビア語史料には、アイニーの年代記として、19～20巻からなる大歴史書、8巻の小歴史書、3巻の要約が知られていた [*Kashf*: 1/287, 2/115; *GAL*: 2/52–53, S2/50–51; 中町 2004: 137]。ここでの「大歴史書」を『真珠』、「小歴史書」を『満月』と見なし、「要約」を『真珠』の要約と見なすことには議論の余地はないが、第4の著作である『満月』要約については、同時代の証言が存在しないことになる。

またこれら4種の年代記が、すべてアイニー1人に帰すべき諸著作であるとするならば、1人の歴史家が生涯においてなぜこれほど多くの年代記を著したのかという疑問が生じよう。

1) 本研究は、文部科学省科学研究費補助金による研究成果の一部である。なお本稿で年月日を併記する際は、先にヒジュラ暦、スラッシュの後に西暦の順で記す。ヒジュラ暦を示す際には月名のカタカナ表記(ムハッラム月、サファル月……)ではなく、算用数字による表記(1月、2月……)を用いる。

しかし1人の歴史家が複数の年代記を著す例は、Baybars al-Manṣūri (d. 1325), ‘Abd al-Bāsiṭ al-Ḥanafī (d. 1514), Ibn Iyās (d. 1524) などのように、マムルーク朝期においては決して珍しいことではなかった [Richards 1998; 菊池 2001; Wasserstein 1992]。それゆえアイニーがそれぞれの著作をどのような意図で著したのかを検討することは、当時の歴史家に広く見られた著述傾向を解明する手がかりとなるだろう。

さらに、拙稿で明らかにしたとおり [中町 2005: 055-057], アイニーの諸年代記のうち、『真珠』以外の作品も一次史料としての重要な価値を有するならば、『満月』以下の3年代記を対象とする文献学的調査は、歴史研究の基礎作業として欠かせない。

このような問題意識から本稿では、アイニーの4種の年代記をそれぞれ独立した作品ととらえ、これら4作品の写本とテキスト内容を検討することにより、著者がそれぞれの作品を、いつ、どのような意図で著したのかを明らかにする<sup>2)</sup>。

## I 『世の人々の歴史における真珠の首飾り』

### 1 執筆年代の検討

現在様々な構成で伝わる『真珠』だが、元来は全19巻という形態をとっていた [中町 2004: 138-140]。これら19巻本のうちの14点は、著者アイニーによる直筆本が現存している。『真珠』の執筆時期を探るには、これらの直筆本が大きな手がかりとなる。これらは、写本サイズや行数など外見上の特徴を共有するほか、すべてのタイトル頁にアイニーの建立した学院、すなわちバドリーヤ学院 (al-madrasa al-Badriyya) へのワクフとする旨を記した書き込みがある点から、ひと揃いのシリーズを構成していると見て良いだろう。むろん、これら以前に書かれた「草稿 (muswadda)」が存在した可能性も考慮に入れるべきではあるが、「イフミーミー写本」などのちの写本群がこのシリーズの写本から書写されていることから<sup>3)</sup>、本稿ではこのシリーズを「完成稿 (mubyadda)」と見なし、このシリーズの執筆時期を『真珠』の成立時期と考える。表1に、それぞれの最終葉の著者奥書に記載された日付を列挙する<sup>4)</sup>。

2) 本稿の分析は、2005年3月、富士ゼロックス小林フェローシップの援助を受けて行った、イスタンブールのトプカプ宮殿付属図書館 (Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi), トルコ・イスラーム芸術博物館 (Türk ve İslam Eserleri Müzesi Kütüphanesi), スレイマニエ図書館 (Süleymaniye Kütüphanesi), セリム・アー図書館 (Hacı Selim Ağa Kütüphanesi), バヤジット国立図書館 (Bayazıt Devlet Kütüphanesi) での写本調査により得られた新知見に多くを負っている。ここに記して謝意を表したい。

3) アイニーの弟子の1人である Muḥammad al-Ikhmīmī によって書写された「イフミーミー写本」群については、中町 2004: 139-140 参照。

4) 中町 2004: 138 表1において、Veli 2377 を『真珠』直筆本として分類しているが、この写本には著者アイニーと後述するシハーブッディーンの双方の筆跡が見られ、さらに内容の上でも『真珠』とは異なっており、むしろ『満月』と分類すべき写本であることが明らかとなった。また、

表1 『真珠』直筆本

所蔵番号	巻 (収載年代)	奥書にある日付
Ahmet 2911/a 1	第1巻	825年1月30日 / 1422年1月24日
Ahmet 2911/a 2	第2巻	825年 / 1422年
Ahmet 2911/a 3	第3巻 (10 AHまで)	825年7月27日 / 1422年7月17日
Ahmet 2911/b 6	第6巻 (61-95 AH)	828年6月26日 / 1425年5月15日
Ahmet 2911/b 7	第7巻 (96-150)	828年 / 1425年
Ahmet 2911/a 8	第8巻 (151-225)	830年 / 1426-1427年
Ahmet 2911/a 9	第9巻 (226-330)	830年 / 1426-1427年
Ahmet 2911/a 10	第10巻 (331-430)	831年 / 1427-1428年
Es'ad 2317	第11巻 (431-520)	831年5月10日 / 1428年2月26日
Ahmet 2911/a 12	第12巻 (521-578)	831年9月8日 / 1428年6月22日
Veli 2390	第13巻 (579-620)	832年1月28日 / 1428年11月6日
Veli 2392	第15巻 (689-707)	奥書に記載無し
Ahmet 2911/a 17	第17巻 (725-745)	奥書に記載無し
Ahmet 2911/a 19	第19巻 (799-849)	奥書に記載無し

表1に掲載した日付は、いずれも末尾の奥書にあってそれぞれの写本が完成した撰筆時期を示すものである。このように第1巻から第13巻までは、825/1422年から832/1428年の間に巻数順に執筆が続けられていたことがうかがえる<sup>5)</sup>。また、第1巻から第3巻、および第11巻から第13巻に記された日付から、1冊の執筆に要した期間はおよそ3~4ヶ月と推測できる。したがって本シリーズの第1巻は遅くとも824年10月頃(1421年10月頃に相当)に執筆が始められたと考えてよいだろう。

日付記載のない写本のうち、第19巻については、その収載内容が849/1445-46年の死亡録までであり、末尾の著者奥書に「850年の記述に続く」と記されている点から、この写本の執筆は850/1446-47年以後になされたものであるとの推測も成り立つ<sup>6)</sup>。しかし、この第19巻の記述内容をより詳しく見るならば、この写本の前半部と後半部はそれぞれ別の時期に著されていることが分かる。本写本における「838年に生じた出来事についての章」との見出しの直前には、「バスマラ」すなわち「慈悲深く慈愛あまねき神の御名において」

↙ 拙稿同箇所において、Ahmet 2911/b 7の収載年代をヒジュラ暦127年までとしているが、これは明らかな誤りであり、実際には150年までの記述を含んでいる。謹んで訂正したい。

5) さらに、イフミー写本群の第14巻であるVeli 2391末尾の奥書にある、832年4月24日 / 1429年1月30日との日付を、これに加えることもできる。

6) イフミー写本群の第19巻の末尾に付された、書写者イフミーによる奥書には、次のような記述がある。「私が見た限り、我らの師、この歴史書の作者の直筆は、カイロのアズハル・モスクそばにある彼のバドリーヤ学院において記されたその直筆本において、ここまでで終わっている。というのも、彼はそれに続く年、すなわち851年にこの世を去っているからである」[Veli 2396: 387 a]。この記述にあるアイニーの没年の情報は誤りであるが、ここから直筆本第19巻の執筆年を850年ないし851年と推測できよう。中町 2004: 138 表1においてこの写本の執筆年を851年としていたのは、このような理由からである。

との定型句が記されており、その箇所の前と後ろで執筆時期を異にしていることがうかがえるのである [Ahmet 2911/a 19: 217 b; *'Iqd/Qarmūt*: 2 / 453, n. 1]。バスマラ以前の部分では、スルターンのバルスバーイの名前が出てくるたびに、「神が彼を助け給わんことを」「神が彼の王権を長からしめんことを」「彼の勝利が偉大ならんことを」といった、在位中の支配者に対して用いられる祈願文が付されており、このことからこの写本の前半部分は、早くとも 838/1434-35 年以降、遅くともバルスバーイの没する 841/1438 年以前に完成したと考えられる [*'Iqd/Qarmūt*: 2 / 262, 272, 273, 277, 278, 283, 288, 290, 321, 330, 345, 354, 430]。後半部分については、バルスバーイへの祈願文は記されておらず、上記の推測に基づき、850/1446-47 年以降の執筆と考えられよう。

以上のように『真珠』は、アイニーの晩年に書かれた第 19 巻後半部分を除いて、824/1421 年末から 841/1438 年までの間に、巻数順に執筆されたものと考えられる。

## 2 序文に記載された情報

次に、『真珠』第 1 巻冒頭に付されたアイニーによる序文の内容を検討する。本文の確定にあたっては、上述の直筆本第 1 巻を底本とし、その他第 1 巻の内容を伝える 3 写本を用いた。バスマラ、神と預言者への賛辞のあと、著者アイニーは以下のように語っている。

さて、豊かなる主の慈悲に乏しき [私こと] Abū Muḥammad Maḥmūd b. Aḥmad al-'Ayni<sup>7)</sup> —— 主が彼 (とその両親)<sup>8)</sup> に秘かな恵みを与えんことを —— は語る。(1) 私はかつて年若き青年時代において、この世の始まりから 805 [1402-03] 年にいたる歴史書を編纂した。それは諸預言者の物語と彼らの時代に起こったこと、我らの預言者の伝記と彼のあとの諸時代におけるカリフや王たちの間で起こったことを、名士たちの死亡録を指し示しながら含んでおり、天上の領域と地上の領域の話でもって飾られていた。(2) そして今、私には、配列においてそれよりも美しく、構成においてより明白にするべく、わずかな増補と、高貴な珍事件、そして述べられた人名・地名で曖昧だった点の確定を伴いつつ、それを書き直す (anqaḥa-hu) ことが始まった。(3) それを題して (tarjamtu-hu) 『世人の歴史における真珠の首飾り』とし、理解が容易になるよう章ごとに区分し、歴史の起源とその意味を説きそれを著すことの原因を語る序文を冠した。 [Ahmet 2911/a 1 : 1 b; Veli 2374: 1 b; Ahmet 2911/c 1 : 1 b-2 a; Ayasofye 2938: 387 b]

下線部 (1) で触れられる「歴史書」とは、次章で扱う『満月』のことと考えられるが、その内容が「805 年にいたる」とされていることは『満月』の執筆年代を考える上で大きな

7) Ayasofye 2938 にのみ “al-Hanafi” とあり。

8) 括弧内は Ahmet 2911/c 1 では欠落。

手がかりとなる。下線部(2)には、本書の執筆目的が述べられている。すなわち『真珠』は、著者がかつて編纂した歴史書の増補・改訂版となるように、明確に企図されて新たに編纂された歴史書であった。

そして下線部(3)には本書の書名が述べられている。「章ごとに区分した」との表現は、実際の『真珠』の内容、つまり、各年の記述が単に事件の生起順に並んでいるのではなく、「官位や役職を与えられたもの話」「使者などでエジプトへやって来た者の話」というような「話(dhikr)」単位で整理されていることとも合致している[中町 2005: 035]。

このように『真珠』の序文では、アイニーが『真珠』執筆に至った経緯や、執筆開始時の作者を取り巻く環境などを同わせる文言は一切なく、ただ旧作を書き直すとの意図が述べられているにすぎない。また、時の支配者や支配エリートへの言及が一切見られないと言う点にも注意を払わねばならない。

## II 『時代の人々の描写における満月の歴史』

### 1 『満月』全体構成と成立年代

従来の研究では『満月』は、『真珠』と混同されることが多く、また別個の作品と見なされるにしても『真珠』の要約の一種と考えられていた<sup>9)</sup>。このような通説に対して拙稿では、Sül. 830 写本を取り上げ、従来『真珠』の1写本と見なされていた同写本が実際にはアイニーの弟であるシハーブッディーン・アフマド・アル=アインタービー Shihāb al-Dīn Aḥmad al-'Ayntābi の書写による、『満月』の第9巻に該当する写本であることを明らかにし、さらにその内容面での検討から、それが『真珠』の要約などではなく独立した別個の作品であることを明らかにした[中町 2004: 148-149; 中町 2005: 033-034]。

では、『満月』には上記写本以外にも現存写本はあるのだろうか。まず表2で挙げたのは、この写本と同じシリーズのものと思われる写本群である<sup>10)</sup>。

表2 『満月』シハーブッディーン写本

所蔵番号	巻(収載年代)	葉数/行数/サイズ	奥書にある日付
Es'ad 2346	3 (11?-17)	104/ 29-31/ 245 × 165	809年6月30日/1406年12月11日
Selim 838	6 (289-487)	238/ 31/ 248 × 160	810年2月1日/1407年7月7日
Selim 839	7 (488-624)	238/ 31/ 248 × 160	812年9月10日/1410年1月16日
Sül. 830	9 (717-799)	217/ 31/ 253 × 163	813年2月1日/1410年6月4日

9) 例えば *'Iqd/Qarmūt*: 2/41。

10) これら4点の他、831年12月3日/1428年9月13日摺筆の日付を持つ Es'ad 2095 写本もまた、筆跡からシハーブッディーンの手書によるものと考えられるが、この写本は一頁あたりの行数が25行と、上記4点とは体裁の面でやや異なっているため、同一シリーズの写本とは見なさなかった。また先述の Veli 2377 写本については、一部シハーブッディーンの手跡を含んでいるが、内

これらの写本は筆跡や形態が Sü. 830 と共通しており、さらにそれぞれの奥書にシハーブッディーンの名前が見られる [Es'ad 2346: 104 a; Selim 838: 238 a; Selim 839: 238 b; Sü. 830: 217 a; 中町 2005: 033-034]。シハーブッディーンについては、人名事典等の同時代史料に一切情報がなく、不明な点が多いが、生年に関しては『満月』中のヒジュラ暦 764/ 1362-63 年に「この歴史の書き手 (kātib al-ta'rikh) は語る、私はこの年の 9 月 (1363 年 6 月 14 日-7 月 13 日) に生まれた。私の実兄にしてこの歴史の編纂者 (jāmi' al-ta'rikh) が 9 月に生まれたのと同様である」[Sü. 830: 75 b] との記述があることから、著者アイニーよりも 2 年あとの生まれであることが分かる<sup>11)</sup>。

これら 4 写本はそれぞれの奥書によれば、809/ 1406 年から 813/ 1410 年の間に書写されている。また表中の巻番号はそれぞれ本文中の言及に従っているが、さらに第 7 巻、第 9 巻の末尾には、それぞれ第 8 巻、第 10 巻に続くとの奥書があることから、この写本群が全 10 巻からなる連続したシリーズであったことがうかがえる。

一方、上記写本以外に、『満月』には著者アイニーの直筆本と見なしうるものが存在する。表 3 を参照されたい。

これら 3 写本は、おそらくは一続きのシリーズを構成していたのであろう。すべての『満月』写本のうち、もっとも古い日付を有するのが直筆本の Ahmet 2911/d 1 であり、アイニーによる『満月』の執筆は遅くとも 799/ 1396 年に始められていたことになる。先に見た『真珠』の序文では、『満月』は 805/ 1402-03 年にいたる歴史書と記述されている。ここから、仮に現存する『満月』の直筆本を『満月』第 1 稿と見なすなら、アイニーによる執筆作業は 799/ 1396 年に始まり、805/ 1402-03 年以降まで続けられたことになろう。

以上の他『満月』には、第 1 巻の内容を含んでいる Es'ad 2165, Selim 833 の 2 写本や、第 9 巻に該当する BL Add. 22360 がある。またこれらのうち、同じ収載時期を有するものの間でも、その記述内容が異なるものもあり、今後さらなる写本研究およびテキスト比較が必要である。

表 3 『満月』直筆本

所蔵番号	巻 (収載年代)	葉数 / 行数 / サイズ	奥書にある日付
Ahmet 2911/d 1	(- 11)	282 / 31 / 266 × 180	799 年 3 月 4 日 / 1396 年 12 月 6 日
Ahmet 2911/d 2	(11 - 66 ~)	299 / 31 / 266 × 180	記載なし
Selim 835	3 (~ 95 - 325)	285 / 31 / 270 × 180	記載なし

↙ 容と体裁の面で上記 4 点と同一シリーズとは考えられない。今後さらなる写本調査によって正確を期したい。

11) 上述拙稿ではシハーブッディーンの没年を 834/ 1430 年としたが、これは Cahen [1936: 354] の記述を受けてのものであった。しかしカーアン自身も述べており、この没年の根拠は曖昧であり、シハーブッディーンの没年としては現時点ではただ「834 年以降」と結論するほかない。

## 2 序文の検討

全体像を再構成するには依然困難の残る『満月』諸写本であるが、第1巻とされる各写本の「序文」に相当する部分を見る限り、写本間異同は少なく、同じテキストであると見なす。以下に序文部分の訳出を行い、内容を検討したい。バスマラ、神と預言者への賛辞に続く内容は以下のとおりである。

さて、力強く豊かなる主の慈悲に乏しきしもべ、[私こと] Maḥmūd b. Aḥmad al-Sharūḥī al-'Aynī—主が彼とその両親に秘かな恵みを与えんことを—は語る。(1) かねてよりとある書物を編纂することが、私の心を満たしていた。[その書物とは] この世の始まりと、諸預言者諸使徒の物語、我らの預言者ムハンマドの伝記と彼のあとの正しきカリフたちと教友と弟子、敬虔な学者たちの伝記、および、その後のあらゆる時代における王やスルターン、アラブやアジャムの様々な集団とその祖や王たち、すべてのウンマと真実と定められた慣習によるイクリームの世界の中からの諸ミッラ、諸宗教の人々の歴史、知られている国や地域の名前の確定を、包含するものである。(2) しかし世間の様々な関わりからくる妨害が、私をそのことから引き離し、長い期間にわたる不運が私から [そのことを] 遠ざけていた。ところが神は私に対し、有り難くも心配事を終わらせ、状況を改善して下さったので、私は義務に正面から向かい、左右の幸運の腕を準備し、記述と編纂の部門へ我が騎馬を跪かせ、抽出と配置の部分へ我が真意を向けさせたのである。こうして私は一冊の書を編纂したが、それは多くの意図と豊富な意義 (maqāṣid kathira wa-fawā'id ghazīra)<sup>12)</sup> を含んでおり、さながら真珠の首飾りを飾る真珠 (farā'id)<sup>13)</sup>、宝石で飾られた首飾りのようであり、それが私の心に去来する物を覆い、私の脳裏に隠れた物に合致するのである。(3) 私はその中で、Abū al-Fidā' 'Imād al-Dīn Ismā'il b. 'Umar b. Kathīr (敬称略) の *al-Bidāya wa-l-Nihāya* の書を基本に据え、珍しくならない限りは彼の道筋に従うことに努力を怠らず、広まってよく知られたことやすでに語られたり重複していたりするもの、つまり、書名の明言やその章における情報源への言及であるが、それらのみを省略した。そして預言者伝については、生じた問題点の説明や、名前や性質で不明瞭な物の確定を付け足し、見る者が言葉のあら探しやある集団の探求にのめり込まないようにした。こうして神の御陰をもって、この大部の書で語られたものの要点と、長老たちが確実なものとして編纂したものの概要ができあがり、(4) 私はそれを『時代の人々の描写における満月の歴史 *Al-Ta'rikh al-Badri fī Auṣāf Ahl al-'Aṣr*』と名付けたのである (sammaytu-hu)。[Ahmet 2911/d 1 : 1 b; Es'ad 2165 : 1 b-2 a; Selim 833 : 1 b-2 b]

下線部 (1) では本書の内容が述べられる。すなわちこの歴史書は、「この世の始まり」

12) Selim 833 では「大いなる意図と親愛な意義 (maqāṣid kabīra wa-fawā'id 'azīza)」とある。

13) Es'ad 2165 では「意義 (fawā'id)」とある。

からの普遍史として構想されていたことが分かり、この点においては先に見た大歴史書『真珠』と変わるところがない。

下線部(2)では、このような史書編纂の願いは世事に煩わされていたため長くかなわずにいたが、このたび神の計らいによって執筆が可能になった、と続く。この記述は、アイニーが『満月』執筆に至った経緯を述べたものと考えうるが、実際に当時アイニーが被っていた何らかの社会的状況の変化を指し示したものののだろうか。

『満月』初稿の執筆開始時期を799/1396年と考えると、その当時のアイニーは、カイロでのアイニーの師である‘Alā’ al-Dīn al-Sayrāmīが790/1388年に没した後、一時的にカイロを追われ、故郷アインターブに戻ったことが伝えられている。その後しばらくの間、アイニーの正確な足取りは分からないが、同時代史料には799/1397年にはエジプトからメッカ巡礼を行ったとあるので、この時期までにはアイニーはカイロに戻ってきていたのだろう[Daw’: 10/132-133]。そして801年12月1日/1399年8月4日にはじめてカイロのムフタシブ職に就任し、まもなく罷免されるものの、その後の3年間で、いずれも短期間ではあるがさらに2度同職への就任・退任を繰り返している[菊池 1983: 156 ff]。このように『満月』執筆時のアイニーは、カイロでの定住を再開した時期に相当すると考えられる。

また下線部(3)では、『満月』におけるアイニーの情報源として、イブン・カシール(d. 1372-73)の*al-Bidāya*が言及されている。『満月』本文中においては、引用元への言及が明示されることがきわめて少ないため、この序文における出典明示は注目すべきである[中町 2005: 035]。ただし拙稿で検討したとおり、少なくともバフリー・マムルーク朝時代の記述に関する限りは、現存する*al-Bidāya*をもってアイニーの『満月』の情報源と見なすことはできないため、この出典明示もそのまま受け取るべきではない。とは言え、この序文における、「彼の道筋に従うことに努力を怠らず」「広まってよく知られたこと……のみを省略した」という文言は、アイニーが何らかの歴史書を抜粋しながらもほぼその記載順通りに記述している、という執筆傾向とも合致している<sup>14)</sup>。

なお下線部(4)のとおり、いずれの写本でも本書の書名を*Al-Ta’rikh al-Badri*としている点は、*Kashf*などに見られる*Ta’rikh al-Badr*との表記と異なっているが、意味の上で大きな違いはないと思われるので、ここでは扱わない。

14) 中町 2005: 044-052, 054-055. なお、旧稿ではバフリー期該当部分におけるアイニーの典拠は*al-Birzālī* (d. 1339)あるいは*al-Nuwayrī* (d. 1333)である可能性が高いとの仮説を提示したが、*Ibn Ḥajar al-‘Asqalānī* (d. 1449)が「*Ibn Kathīr*が途絶えたあとは、彼(アイニー)の典拠は*Ibn Duqmāq*の歴史書であった」[*Inbā’*: 1/3; *Kashf*: 1/287; Rosenthal 1968: 356]と述べていることから、*Ibn Duqmāq* (d. 1407)の散逸した年代記がアイニーの典拠となっている可能性も考慮すべきであろう。



## Ⅲ 『真珠』要約

筆者は拙稿において、従来『真珠』第18巻と見られていた Ahmet 2911/a 18 を取り上げ、テキスト内容の検討からこれを『真珠』の要約と判断した [中町 2004: 147-148]。これ以外で『真珠』要約の内容を含む写本は、表4のとおりである。

これらはいずれもアイニー自身の筆跡で書かれており、収載年代の連続性からも、これらがひと揃いの写本群を構成することが分かる。ただし、これらは冒頭および結語を欠いており、全体でどのような構成になっていたのかは不明である。

これらのうち Selim 840 のみが、奥書に搁筆時期を載せているが、これと先に見た『真珠』正本の収載内容、執筆時期とを比較することによって、表5のように、それぞれの執筆

表4 『真珠』要約写本

所蔵番号	収載年代	葉数 / 行数 / サイズ	奥書にある日付
Ahmet 2911/b 2	95-520	233 / 31 / 273 × 178	記載なし
Selim 840	521-726	234 / 31 / 270 × 175	834年10月4日 / 1431年6月14日
Ahmet 2911/a 18	727-835	217 / 30 / 275 × 180	記載なし

※Ahmet 2911 の b2 および a 18 は、トプカプ閲覧室にあるカタログではそれぞれ b1, b2 と改められている。本稿では従来の研究との整合性を鑑み、Karataş [1966: 396] の表記にしたがって b2, a 18 としておく。

表5 『真珠』および『真珠』要約の直筆本各巻の完成時期

『真珠』			『真珠』要約		
巻 (収載年代)	所蔵番号	完成年 (AH)	(収載年代)	所蔵番号	完成年 (AH)
1	Ahmet 2911/a 1	825/01/30			
2	Ahmet 2911/a 2	825			
3 (-10)	Ahmet 2911/a 3	825/07/27			
4 (11-23)		825-828			
5 (24-60)		825-828			
6 (61-95)	Ahmet 2911/b 6	828/06/26			
7 (96-150)	Ahmet 2911/b 7	828			
8 (151-225)	Ahmet 2911/a 8	830			
9 (226-330)	Ahmet 2911/a 9	830	(95-520)	Ahmet 2911/b 1	831 以降
10 (331-430)	Ahmet 2911/a 10	831			
11 (431-520)	Es'ad 2317	831/05/10			
12 (521-578)	Ahmet 2911/a 12	831/09/08			
13 (579-620)	Veli 2390	832/01/28			
14 (621-688)		832/04/24	(521-726)	Selim 840	834/10/04
15 (689-707)	Veli 2392	834 以前			
16 (708-724)		834 以前			
17 (725-745)	Ahmet 2911/a 17	834 以前			
18 (746-798)			(726-835)	Ahmet 2911/a 18	838 以降
19 (799-837)		838-841			
(838-849)	Ahmet 2911/a 19	850 以降			

※斜体は推定による完成時期を示す。

年代が限定されることになる。つまり、正本第17巻までは825/1422年から834/1431年の執筆であり、要約の執筆は早くても831/1428年に始まり、834/1431年およびそれ以降まで続けられていたのである。

#### IV 『満月』要約、あるいは『時代と世の人々の描写における流星の歴史と輝く月』

アイニーのものとされる年代記のうち、残る『満月』要約の正体は何であろうか。ここではまず拙稿で扱った写本 Selim 837 について、詳しく見てみたい。

葉数 252 葉，1 葉当たりの行数は 25 行，サイズは縦 276 cm，横 182 cm のこの写本は、冒頭部分を欠いているためにタイトル頁がなく、元来この写本に与えられていた書名は不明である。セリム・アー図書館の蔵書台帳はこの写本を『満月』としているが、内容は『満月』正本の内容とは大きく異なっている。書写者はその筆跡からアイニーの弟、シハーブッディーンとおぼしい。では、この Selim 837 は果たして何の写本なのだろうか。

筆者は当該写本を、『時代と世の人々の描写における流星の歴史と輝く月 *Al-Ta'rikh al-Shihābi wa'l-Qamar al-Munir fī Awaṣāf Ahl al-'Aṣr wa'l-Zamān*』（以下『流星』と略）との書名を持つ年代記の一部をなすものであると考える。『流星』についてはすでに Cahen [1936: 354] や Karatay [1966: 385–386] がその存在を指摘しており、その著者はアイニーではなく弟のシハーブッディーンとされる。しかし同時代史料にはこの『流星』を伝える情報は皆無であり、また前述のとおり著者とされるシハーブッディーンについても一切の伝記情報を欠いている。

筆者はトルコでの写本調査によって、Cahen, Karatay が指摘する 5 点の写本を実見し、これら 5 点がいずれもシハーブッディーンの直筆であることを確認した。その詳細は表 6 のとおりである。

これら 5 点はいずれもタイトル頁に、本文と同じ筆跡によるワクフ設定文が見られる。そこには、これら 5 点が著者シハーブッディーンにより、834 年 3 月 15 日 / 1430 年 12 月 1 日にワクフとされたことが記されている<sup>15)</sup>。上述の Selim 837 写本には、このようなワクフ

表 6 『流星』写本

所蔵番号	巻 (収載年代)	葉数 / 行数 / サイズ	奥書にある日付
Ahmet 2952/ 2	2 (1–14)	186/ 25/ 280 × 180	833 年 7 月 3 日 / 1430 年 3 月 28 日
Ahmet 2952/ 3	3 (14–64)	188/ 25/ 278 × 180	833 年 10 月 11 日 / 1430 年 7 月 2 日
Fatih 4222	4 (64–229)	188/ 25/ 273 × 185	834 年 2 月 4 日 / 1430 年 10 月 22 日
Fatih 4223	5 (230–426)	188/ 25/ 275 × 180	834 年 6 月 20 日 / 1431 年 3 月 5 日
Ahmet 2952/ 6	6 (427–571～)	140–/ 25/ 280 × 190	記載なし

15) マムルーク朝において、書物をワクフとする事例については、Sayyid 1997: 2 / 433 ff を参照。

設定文は付されていないものの、筆跡やサイズなどの外見目で、これら『流星』5写本との間に類似が見られる。これらがすべてシハーブディーンの筆になるものであることは間違いない。

一方、テキスト内容について検討をしたのが表7である。ここではヒジュラ暦565/169-70年をサンプル対象とし、当該年の記述を含む『真珠』、『真珠』要約、『満月』および『流星』の4テキストの記述内容を比較した。すると、事件の記載順については『流星』は『満月』の順序に従っており、また個々の記述内容についても『満月』ときわめて近いということが分かった。記事数の少ない『流星』は『満月』の要約と見なすことができ、これは草稿で行った728/1327-28年のサンプルテストにおける、Selim 837と『満月』正本との関係に一致する [中町 2004: 149-150]。

ただし、Selim 837の本文中には、ムアイヤド・シャイフ al-Mu'ayyad Shaykh に対する祈願文が記されることが多い点に注意せねばならない。このことはこの写本がシャイフの在位中である815-824/1412-1421年間に著されたことを示しており、現存する『流星』写本5点よりも、10年から20年早い時期に書かれたことになる。しかし、Selim 837の末尾が走り書きになっている点から、これは『流星』完成前の草稿の1つと見なすべきだろう。いずれにせよシハーブディーンは、『満月』を基にして独自の年代記作品を執筆したと言えるのである。

### むすび：アイニーの経歴と歴史叙述

以上の分析を踏まえ、それぞれの著作をアイニーの政治的・社会的キャリアの中に位置づける作業を行って、本稿を締めくくりたい<sup>16)</sup>。

これら4作品のうち、最初に書かれたのは『満月』であり、その第1稿の執筆時期は、アイニーがカイロでの定住生活を再開した時期にあたる。政治史との関わりでは、ザーヒル・バルクーク al-Zāhir Barqūq の晩年からその子ナースィル・ファラジュ al-Nāṣir Faraj の治世に相当するが、この2君主とアイニーとの間には、深いつながりがあったとは確認されない。

その後、アイニーが『真珠』を執筆した期間は、彼との深い結びつきで知られるバルス

↙ のこと。また地域・時代は異なるが、岩武 [1995: 292-302] が訳出・分析する、イルハン朝時代の『ラシード著作全集』に付されたワクフ条件とも比較することができる。

16) アイニーの経歴については、*Iqd/Qarmūt*: 2/8-50, *Iqd/Rizq*: 1/17-27, *Sayf*: alif-mim など各校訂本の前書き、および Marçais 1960, Broadbridge 1999, 中町 2004: 136-137などを参照。なお、筆者は現在、アイニーおよびその弟が年代記中で断片的に残した自伝的記述を通して、アイニー兄弟の経歴を再検討する論考を準備中である。

表7 ヒジュラ暦565年の記述に関する各テキストの記載内容

	『真珠』における段落	『真珠』刊本における頁数	『真珠』要約	『満月』	『流星』
残りの出来事	サラディンのディミヤート包圍	33	1	1 (-)	1 (-)
	ヌールッディーンへの援軍要請	〃	2	2	2
	フランクの撤退	34		3, 5	3, 5
	Baybars al-Mansūri による異聞	〃	3 (-)		
	シリアのフランク情勢	〃	4		
	<i>Mir'āt al-Zamān</i> による異聞	35			
	サラディン、アーディドから資金援助	〃	5	4 (-)	4 (-)
	ヌールッディーンへの反応	〃	6 (-)	8 (+)	8 (+)
	Ibn Shaddād による異聞	〃			
	al-Imād による異聞	36			
	<i>Kitāb al-Dawlatayn</i> による異聞	〃		6, 7	6, 7
	異聞	37			
	ヌールッディーン、アーディドへ書状	〃			
	詩行	38			
	詩行	〃			
	al-Imād による詩行	39			
	エジプトでアザーンの改訂	〃			
	ビーラ太守がヌールッディーンへ	〃			
	アンダルスでの戦争	40		12 (-)	
	イラク情勢	〃			
	サラディンの断食明け祭	〃			
	サラディン父のカイロ到着	〃			
	詩行	41			
	ヌールッディーン、ダリヤーへ	〃	7	9	9
	<i>Mir'āt al-Zamān</i> による異聞	〃	7 (-)		
	Ibn al-Athir 伝える大地震	〃	8 (-), 9	10 (-)	10 (-)
	アレppoの状況	42	10		
	フランク諸国の状況	〃	11		
	al-Imād による異聞	〃	12 (-)		
	al-Imād による詩行	43			
	詩行	〃			
	詩行	〃			
	<i>Mir'āt al-Zamān</i> による異聞	44	13		
	異聞	〃	14 (-)		
	Ibn al-Jawzi による異聞	〃		11	11
	フランク	45			
	空白	〃			
	巡礼	〃	15	13	12
	問題事について	Aḥmad b. Šālih b. Šāfi' al-Jili	46		14
Aḥmad b. 'Umar b. Muḥammad al-Azaji		〃		15	
Hibatullāh b. Muḥammad al-Bukhārī		〃			
al-Malik Tuḡhril b. Qawart		〃	16		
Qūṭub al-Dīn Mawdūd b. Zankī		47	17	19	15
Ibn Khallikān による異聞		〃	18 (-)	20	
Ibn Kathir による異聞		48	19	21	
<i>Kitāb al-dawlatayn</i> による異聞		〃			
続き		〃			
続き		〃			
Ibn al-Athir による異聞		49			
Majd d. Abū Bakr b. al-Dāya		〃	20	22	
Amir Ḥājjib al-Imādi		〃	21		
<i>Mir'āt al-Zamān</i> による異聞		50	21 (-)		
Sibṭ b. al-Jawzi による異聞		〃	21 (-)		
'Āmil Qawmasan		〃	22	17	13
詩行		〃		18	14
Tāwūs umm al-Mustanjid	〃	23	16		

※使用した刊本・写本は以下のとおり。『真珠』*Iqd/Rizq*: 1/33-50, 『真珠』要約 Selim 840: 31 a-32 a, 『満月』  
Selim 839: 99 a-100 a, 『流星』Ahmet 2952/6: 127 b-128 a.

※段落の区分は刊本 *Iqd/Rizq* 中の形式段落に従い、適宜小見出しを付した。

※『真珠』要約以下の欄にある数字は、各テキストにおける情報の記載順を示し、『真珠』正本の記述と比べて明らかに情報量が多い時には“+”を、少ない時には“-”を付した。

バーイの治世にはほぼ相当する。ただし、バルスバーイが傀儡のスルターン、サーリフ・ムハンマド al-Ṣāliḥ Muḥammad b. Ṭaṭar の元で「王権の秩序 [の保持者] (niẓām al-muluk)」として実権を握ったのは824年12月15日 / 1421年12月11日であり、その後自らスルターン位に就いたのは825年4月8日 / 1422年4月1日である [ʿIqd/Qarmūt: 2 / 162, 180; Sulūk: 4 / 593, 607; Inbā': 7 / 432, 453]。先に検討したように『真珠』の執筆開始時期を824年10月 / 1421年10月頃と考えるならば、これはバルスバーイが実権を握る時期よりもやや先んじる。したがって、『真珠』の大部分はバルスバーイの治世中に執筆されてはいるが、その執筆開始はバルスバーイの台頭以前から構想されていたと考えられる。このことは、序文に特定の支配者への言及が一切見られないこととも一致するだろう。つまり、執筆開始の時点では、『真珠』は捧げるべき相手を指定されない史書だったのである。『真珠』の執筆意図を考えるならば、アイニー自身が序文で語るように、かつての自著を「より美しく」「より明白に」「書き直す」というような、歴史家アイニーの学問的態度に求めるべきであろう。

しかしながら、同時代人の al-Maqrizī (d. 1442) は828 / 1425年の記事の中で、アイニーがバルスバーイの前で「諸王の歴史を読みあげ」ていたと述べており、またイブン・ハジャールは、アイニーが御前で「大部の歴史書」を「読誦して」いたとする [Sulūk: 4 / 698; Raf': 432]。これらの証言からは、この『真珠』こそがバルスバーイの御前で読みあげられた書物であると見なしうる。執筆開始の時点では純粋な学問的営為であったはずの『真珠』が、結果として、君主の前で読みあげるための作品となったのである。

ただし、君主の御前講話のテキストとしては、大部の『真珠』よりは、より簡潔な『真珠』要約版の方がふさわしいだろう。『真珠』の執筆がほぼ済んだあとで、アイニーがその要約版の執筆を始めたのは、バルスバーイの前で読み語るための史書を編纂するという目的があったのではないだろうか。

一方、このような史書編纂の流れの中で、弟シハーブッディーンの果たした役割にも注目すべきである。彼は歴史家アイニーに非常に近い立場にあり、『満月』の作成には書写者として関与し、その要約を自らの歴史書『流星』として著した。その一方で、シハーブッディーンは『真珠』の正本、要約のいずれの執筆にも関わっていないと考えられる。これは、シハーブッディーンが『流星』が『真珠』と同時期に作成されたにもかかわらず、その中には『真珠』からの情報が見られず、もっぱら『満月』のみを情報源としている点からも裏付けられる [中町 2004: 149–150]。このことは、執筆当初の『真珠』がどのような読者層に読まれたのかをうかがい知る手がかりともなるが、この問題については同時代史料との内容比較などを通してより詳細に分析する必要がある。

以上、本稿では従来アイニーの著作と考えられてきた4つの歴史書について、それぞれの執筆時期と執筆意図とを検討した。アイニーが自著『満月』を大幅に書き改めて『真珠』を執筆した動機に、特定の君主との関わりや政治的な意図を見ることは難しい。しかし、その

結果完成した『真珠』あるいはその要約を、スルターンの御前で披露するという行為により、スルターンの信を得て社会的地位を獲得していたということが指摘できる。ここには自らの保有する文化資本を、歴史書執筆およびその読誦を通して、政治的権力へと変換させる、1人の知識人の姿が見て取れるのである。

## 参 考 文 献

- Ahmet : Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi MS Ahmet III.
- Ayasofye : Süleymaniye Kütüphanesi MS Ayasofye.
- BL Add. : British Library MS Add.
- Daw'* : Al-Sakhāwī, *Al-Daw' al-Lāmi' li-Ahl Qarn al-Tāsi'*, 12 vols., Beirut, n.d.
- Es'ad : Süleymaniye Kütüphanesi MS Es'ad Efendi.
- Fatih : Süleymaniye Kütüphanesi MS Fatih.
- GAL* : Brockelmann, C. (1891 – 1949) *Geschichte der arabischen Literatur* I–V, Leiden.
- I'lān* : Al-Sakhāwī, *Al-I'lān bi-l-Tawbīkh li-Man Dhamma al-Ta'rikh*, Damascus, 1349 AH.
- Inbā'* : Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Inbā' al-Ghumr bi-Anbā' al-'Umr*, 9 vols., Hyderabad, 1967 – 76.
- Iqd/Qarmūt* : Al-'Aynī, *Iqd al-Jumān*, al-Qarmūṭ, 'A-R. Ṭ. (ed.), 2 vols., Cairo, 1985, 1989.
- Iqd/Rizq* : Al-'Aynī, *Iqd al-Jumān*, Rizq M., M. (ed.), 2 vols., Cairo, 2002 – 2004.
- Kashf* : Ḥājji Khalifa, *Kashf al-Zunūn 'an Asāmi al-Kutub wa-l-Funūn*, 2 vols., Istanbul, 1941 – 43.
- MSR* : *Mamlūk Studies Review*.
- Nujūm* : Ibn Taghribirdī, *Al-Nujūm al-Zāhira fī Mulūk Miṣr wa-l-Qāhira*, 16 vols., Cairo, n. d.
- Raf'* : Ibn Ḥajar al-'Asqalānī, *Raf' al-Iṣr 'an Quḍāt Miṣr*, Cairo, 1998.
- Sayf* : Al-'Aynī, *Al-Sayf al-Muḥannad fī Sirat al-Malik al-Mu'ayyad*, Cairo, 1998.
- Selim : Hacı Selim Ağa Kütüphanesi MS.
- Sül. : Süleymaniye Kütüphanesi MS Süleymaniye.
- Sulūk* : Al-Maqrizī, *Kitāb al-Sulūk li-Ma'rifat Duwal al-Mulūk*, Cairo, 1939 – 72.
- Veli : Bayazit Devlet Kütüphanesi MS Veliyyüddin Effendi.
- Berkey, J. P. (1992) *The Transmission of Knowledge in Medieval Cairo : A Social History of Islamic Education*. Princeton.
- Broadbridge, A. F. (1999) Academic Rivalry and the Patronage System in Fifteenth-Century Egypt : al-'Aynī, al-Maqrizī, and Ibn Ḥajar al-'Asqalānī. *MSR* 3, 85 – 107.
- Cahen, Cl. (1936) Les chroniques arabes concernant la Syrie, l'Égypte et la Mésopotamie : de la conquête arabe à la conquête ottomane dans les bibliothèques d'Istanbul. *REI* 10, 333 – 362.

- Flemming, B. (1977) Literary Activity in Mamluk Halls and Barracks. In: Rosen-Ayalon (ed.) *Studies in Memory of Gaston Wiet*. Jerusalem, 249-260.
- 岩武昭男 (1995) ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書 関西学院大学東洋史学研究室 (編) 『関西学院大学東洋史学専修開設三十周年記念論集: アジアの文化と社会』 法律文化社, 277-310.
- Karatay, F. E. (1966) *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Arapça Yazmalar Kataloğu* III. Istanbul.
- 菊池忠純 (1983) マムルーク朝時代カイロのムフタシブ: 出身階層と経歴を中心に 『東洋学報』 64: 1-2, 131-176.
- 菊池忠純 (2001) マムルーク朝時代15世紀末の一史書の成立過程について: 'Abd al-Bāsiṭ al-Hanafi のイスラム暦848年/西暦1444年4月20日から1445年4月8日の叙述の検討を通じて 『東洋史研究』 59, 34-81.
- Marçais, W. (1960) AL-'AYNĪ. *EI*<sup>2</sup> 1, 790-791.
- 中町信孝 (2004) バフリー・マムルーク朝時代史料としてのアイニーの年代記: ヒジュラ暦728年の記述を中心に 『オリエント』 46: 2, 134-160.
- 中町信孝 (2005) アイニーの2年代記の執筆手順とその史料価値: 『イクド・アル=ジュマーン』 第17巻前半部の出典分析 『東洋学報』 86: 4, 031-063.
- Petry, C. (1981) *The Civilian Elite of Cairo in the Later Middle Ages*. Princeton.
- Richards, D.S. (1998) Introduction. In: *Zubdat al-Fikra fī Ta'rikh al-Hijra, Baybars al-Manṣūrī al-Dawādār*. Berlin, XV-XXV.
- Rosenthal, F. (1968) *A History of Muslim Historiography*. Leiden.
- Sayyid, A. F. (1997) *Al-Kitāb al-'Arabi al-Makḥṭūṭ wa-'Ilm al-Makḥṭūṭāt* I-II. Cairo.
- Schimmel, A. (1965) Some Glimpses of the Religious Life in Egypt during the Later Mamluk Period. *Islamic Studies* 5, 353-392.
- Wasserstein, D. J. (1992) Tradition manuscript, authenticité, chronologie et développement d'oeuvre littéraire d'Ibn Iyas. *JA* 280, 81-114.

(日本学術振興会・早稲田大学大学院文学研究科)